

チャランケ通信 第 571 号 2025 年 8 月 24 日

甲子園、沖縄尚学高校が初優勝へ、沖縄勢として 2 回目の優勝

第 107 回目となる夏の高校野球の決勝戦が終わり、沖縄尚学高校が初めて優勝し、沖縄勢としては二度目の優勝旗を沖縄にもたらした。敗れた日大三高も堂々と戦い抜き、3 対 1 という接戦で、決勝戦として誠に見ごたえのある戦いであった。戦後長い間沖縄は、アメリカによる占領統治下に置かれていたこともあり、判官贔屓も手伝ってついつい沖縄尚学の応援に回っていたようだ。

私自身が生まれ育った広島県呉市は戦前から野球の盛んなところで、阪神タイガースの藤村富美男や読売ジャイアンツの広岡達郎といった一世を風靡した名選手を多く輩出していた。何よりも、広島カープというプロ野球球団があり、広島市民、広島県民の野球チームとして愛されていたことは言うまでもない。1975 年(昭和 50 年)、今からちょうど半世紀前、広島カープが初めてセリーグのペナントレースで優勝した時の広島の興奮ぶりは、いまでもしっかりと脳裏に焼きついている。

テレビ放映に一喜一憂した子供時代、野球と相撲放映が好評

小さいころから野球少年として、プロ野球だけでなく高校野球にも関心を持ってきただけに、今年の甲子園での戦いには久方ぶりにテレビ観戦と相成った次第だ。初めてテレビで高校野球を見たのは昭和 30 年代前半だったと思う。もちろん自宅にテレビはなく、近所の電気屋さんの前で立ち見していたわけだ。最初の頃はカラーテレビではなく白黒ではあったが、ピッチャーの投げる球筋がよく見え、臨場感あふれる野球ドラマに一喜一憂したものだ。もしかすると、野球以上に人気があったのが大相撲だったかもしれない。テレビを見ながら解説を聞いて取り組み内容が理解できるのだが、ラジオ放送だけではあまりにも取り組みのスピードが速すぎて、アナウンサーの言葉が追いつかないために何をしゃべっているのか理解できないことが多かった。相撲の取り組みは、テレビ放映によって国民的な広がりへと進んでいったように思える。

プロ野球ファンとして、球団数の増加や多角的な営業努力が必要

私自身、自宅にテレビが入ったのは皇太子と美智子さんの結婚式のパレードがあった直前であり、高度成長時代の絶頂期、今から 60 年以上前のことだった。それ以降、いろいろな曲折はありながらもプロ野球は多くの国民の間にファンが増え、一時期パリーグの人气がセリーグに比較して落ち込んでいたこと

もようやく払拭され、セパ交流戦が導入されるなどプロ野球ファンを拡大すべく努力が積み重ねられている。さすがに 2004 年の 1 リーグ制への移行話は出なくなったようだが、今求められているのは王貞治さんが 24 日付日経新聞「直言」で述べておられるように、チーム数をもう少し増やすことなのかもしれない。四国や本州の日本海側、更には沖縄など、プロ野球チームがない地域に新しいチームを作っていく必要があると指摘されていて納得的である。地域活性化とも結びついて経済的な効果も上がると思う。

アメリカの先進事例に学び、韓国や台湾などとも連携を

とはいえ、最近ではサッカーやバスケットボール、更にはバレーボールなど、他のスポーツのプロ化が進み始めており、戦前からプロ化が進んだベースボールをどうすれば国民の間に広げられるのか、アメリカなどの先進事例などに注目すべきではないか、といった議論も出始めている。とりわけ、テレビの放映権などをどううまく活用していけるのか、プロフェッショナル球団としての経営力が問われているのだと思う。さらに、アメリカ大リーグとの交流戦や韓国、台湾などとのリーグ戦などの企画も語られるようになってきており、グローバル化に向けた努力も不可欠なのだろう。要は、国民にとってワクワクするようなエキサイティングなプレーが繰り広げられることが重要なのであり、最近では野球以外のプロスポーツとの競争(特にサッカー人口は野球人口を上回ったとのことだ)が激しくなっている。人口が減少し始める日本において、どうすればこれからもプロとして発展していけるのか、とりわけ、競技人口の減少をどう防いでいけるのか、グローバルな視点に立ったマネジメント能力を育てていく必要があるのだろう。

今週は、趣向を変えて、スポーツに関して感ずることを思いつくままに述べてみました。くれぐれも熱中症にならないようお互いに気を付けたいものです。